

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<https://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create , TOHOKU!

2 0 2 5 年（ 令 和 7 年 ） 9 月 16 日 火 曜 日

無料

第160号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）9 月 16 日 火曜日

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71 歳の新人
歴史映像作家兼プロデュー
サー。3 作目の「古代製鉄の
埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】
の大崎上映会は延期。とは
いえ新型コロナ禍を乗り越
えて 4 作目制作に向けて奮
闘中。趣味は古代史・縄文
文化研究。埋もれた歴史を
発掘することと東北から日
本を変えることを標榜。



東北水産業の未来 その① 列島近海の魚が大移動している

海水温が1度上昇するということは魚にとって一大事
それで住み慣れた場所も捨てて移動するのは当然
そうした現象が全国で起きているなかで東北水産業を考え
る前に列島で何が起きているかを考えよう！

異常な暑さ

この国のだれもが感じて
いるように、最近のこの国
の天候は異常である。

まずは異常な暑さがある。
先月中は「殺人的」といつて
もいいレベルで、九月にな
っても猛暑が続いている。

全国各地の気温は三十度
台の後半もめずらしくなく、
四十度越えもあった。そし
て各地で「観測史上最高気
温」がニュースにもなった。
北海道の札幌で三十二度越
え、東端の釧路でさえ三十
度越えである。

いったいこの列島の突然
の気温急上昇はどうして起
こったのか、この先も変わ
らないのかとだれもが不安
に思っているだろう。

「線状降水帯」と「雷」

日本列島で「線状降水帯」
という言葉を使ったのは今
から十年ほど前ということ
だが、昨年は「線状降水帯」
がもたらす大水害「ユース
」が頻繁だったので、かなり
一般化した。

現在のところは、その発
生原因が正確に分からず、
根本対策も出来ず、結果と
して対処のしようもない。

そのため突然襲ってくる
大災難としての短時間集中
豪雨が全国で甚大な被害を
もたらしている。

国の治水対策の基本を構
成する時間当たりの降水量
を短時間で軽々と越えて雨
が降るから、排水機構から
あふれた水が街や平地に流
れて川のようになるのだ。

また、「線状降水帯」発生
時には「強烈な雷」も伴う。
筆者も、この夏、「線状降
水帯」と「雷」のセットを二
度も体験した。

雨は横断歩道上を二十
センチ以上の深さで流れ、
「雷」が同じ場所をぐるぐる
とめぐり、しつこく追い回
された。あまりの音と地響
きで恐怖を何度も味わった。

温暖化と海水の急上昇

日本列島は周囲を海に囲
まれている。そのため陸地
の温度も大陸に比べて比較
的温暖だと教えられてきた。

しかし温暖だった海水温
は短期間で急上昇している。
急上昇するから「線状降
水帯」が海上で発生するの
だ。

これが、世界中で懸念さ
れている「地球温暖化」とま
ったく無縁とは思えない。

温暖化は太平洋の島しょ
諸国の問題とたかをくつ
ていたが、日本もいつのま
にかすでに巻き込まれてい
るのではないのか？

各地の漁港の水揚げに 異変―魚が大変化した

気象異変だけでなく、列
島太平洋側を北上する黒潮
が大蛇行していた。この蛇
行の発生と終了に伴い、各
地で水揚げされる魚に異変
が起きている。

蛇行に伴う海水温変化で、
これまで獲れていた魚が獲
れず、まったく別の場所で
水揚げされるという現象が
多発している。

*

いま日本列島で起きている
これらの異常な現象は、
それぞれが単独で起きている
とは思えない。深い関連
があると考えるのは自然だ。
そこで、今回号を起点とし
数回シリーズでこの問題
を考えていくことにする。

最終的な目的は、従来か
ら多くの課題を抱える『東
北水産業』の近未来を検討
するためである。

まずは、列島全体の魚の
水揚げの変化を取り上げる。

昨年まで不漁・小型化のサンマが今年は豊漁・大型化した
いったい何が原因で、どうなっているのだろうか？



今年獲れた丸々と太ったサンマ・・・JlI.COM（2025. 9.2）



2023 年の小ぶりで痩せたサンマ・・・TDC 東北放送（2023. 12.12）

三陸沖の水温上昇をもたらす黒潮の進路異常



黒潮大蛇行図・・・河北新報オンライン（2025.5.30）より

魚の異変①—今年は一転して『サンマ』が豊漁

最初に取り上げる魚の異変は秋の味覚の代表格で、大衆魚と言われてきた『サンマ』である。

その『サンマ』がここ何年もずっと不漁で小型化してかつ高値で、「高級魚」と皮

肉られるほどだった。しかし、今年は一転して豊漁で、しかも大型化して

いて、安価と大変化した。その変化を実感するため、

今年獲れた『サンマ』と、一昨年に獲れた『サンマ』の写

真を見比べて欲しい。明らかにその大きさ、ふ

くらの違いが分かる。各地域の漁業関係者も同様の傾向を指摘している。

何が起きたのか？—「黒潮大蛇行の終息説」

魚にとっては、身体全体をおおわれている海水温が一度上昇するというのは死活問題であり、環境適能力の高い人間とはまったく異なる。

そうした観点を含めて、今年なぜ『サンマ』が獲れるようになったのかを考えてみると、ずばり、その理由は「黒潮大蛇行の終息」であるという説があるのだ。

「黒潮大蛇行」とは、図のように、太平洋側に沿って流れ込む暖かい海流「黒潮」が、東海沿岸南部で発生した冷たい渦を避けるように南に大きく曲がってしまう現象である。

これにより三陸沖などで

は、水温が上昇し不漁が続いたが、今年四月に終息して、漁場が変化したことで冷たい海を好む『サンマ』の漁獲量が増えた可能性が考えられているとのことなのである。

『サンマ』の豊漁は一時的なもの？

こうしたことが原因で、今年八月の全国の『サンマ』水揚げ量は約五千トンで、昨年の同じ時期の二倍ほどで、さらに九月の水揚げ量は八日までで、すでに約五千トンに達している。

しかし専門家は、こうした『サンマ』の豊漁は一時的なものである可能性があるとも指摘している。

「去年の漁獲量に比べると多いが、長期的に見ると

必ずしも多いとは言えない状態です。10年ぐらいたると8月下旬までで2万トンを超えていた年もありまして、普通は1万トン近くだった年が続いていましたので、ここの8月までの漁獲量が飛び抜けて多いということではない。」(STV ニュース北海道 2025/9/10)

漁獲量急上昇が逆に漁獲量を調整するはめに

その同じ研究者はまた次のようにも指摘する。

「サンマの漁獲量は5年くらい少なくなっていましたので、港や市場での受け入れ態勢も落ちてしまっていて、以前より少ない量で処理しきれなくなる」と。

また『サンマ』の漁業者で作る団体「全さんま漁業組合」によれば、取れ過ぎて漁獲量を調整しているという。その組合はさらに続けて、水揚げするたびに二十四時間休漁するルールを決めたという。理由は港がパンク状態だからだとのこと。

長年の不漁で縮小してきた市場の処理能力を超えてしまう状態になり、『サンマ』を入れる発泡スチロールや氷が足りなくなったり、船から『サンマ』を運ぶ資材など色々な物が不足しているため、漁獲量を調整せざるを得ないというのである。

『黒潮大蛇行犯人説』を徹底追及する サンマの豊漁はその説で説明がつきそうだが…

沿岸に大きな影響を与える「黒潮」

黒潮とは、北太平洋の海上に吹く風が起こす海の流れのことで、フィリピンのルソン島あたりから流れが強まり、台湾東岸、東シナ海、そして日本の太平洋沿岸を流れています。この黒潮が沿岸を離れ、沖合に大きく蛇行することがあり、これを「黒潮大蛇行」と呼んでいます。

なぜこのように黒潮が蛇行するのは、まだ解明されていません。

この大蛇行が発生すると、遠州灘沖の水温が低下することがわかっており、低温を好まない魚は、ほかの場所に移動してしまいます。

黒潮大蛇行の発生

この黒潮大蛇行が、2017年から発生しました。2020年にかけて駿河湾のサクラエビが不漁となりました。ほかにもシラスの不漁や紀伊半島沖でのサンゴの大量死なども起きており、過去の海洋データと漁の状況との照合から、この大蛇行が関係しているのではないかと考えられています。

東海大学海洋学部 海洋理工学科 海洋理工学専攻 准教授・高橋 大介氏の「夢ナビ」講義 No.11352 より

すべての魚の移動原因が黒潮大蛇行終了か？

なるほど、今年になってから急に『サンマ』が豊漁になったのは「黒潮大蛇行」が終わったからだという説にはとても説得力があるように感じられる。

しかし、海洋の研究をしている東海大学の研究者の研究の一部を拝借して考察してみると、どうもそんなに単純な話でもなさそうなのがしてくる。

その研究によれば、「黒潮大蛇行」が発生すると、「遠州灘沖の水温が低下するこ

とがわかっており、低温を好まない魚は、ほかの場所に移動してしまいます。」とある。

続けて、「2020年にかけて駿河湾のサクラエビが不漁となりました。ほかにもシラスの不漁や紀伊半島沖でのサンゴの大量死なども

起きており、過去の海洋データと漁の状況との照合から、この大蛇行が関係しているのではないかと考えられています。」

しかし、「なぜこのように黒潮が蛇行するのは、まだ解明されていません。」とも表明している。

こうした表明から分かるのは、限定されたエリア、限定された魚種で起きている現象を説明するのにこの「仮説」が有効であるということだけではないのか？

単に『サンマ』豊漁や、遠州灘沖で起きている現象に適用は出来ても、日本近海すべてで起きている「魚の大移動現象」すべてには適用できないのではないかと

思います。『サンマ』以外の異常現象としては、銚子漁港の今年

のイワシ水揚げが去年の一八九〇倍になった話、宮城県志津川湾ではイセエビが豊漁で、九月八日までの水揚げ量は前年度の七倍近くになった話、山形の酒田港のイカの水揚げは去年の同じ時期に比べるとおよそ倍の量という話など数えきれない現象が起きている。

こうした魚を含め、すべての魚の大移動に関して、この『黒潮大蛇行説』は万能だと言えるのだろうか？

それを順次検証してみようと思う。

宮城のイセエビ豊漁は『黒潮大蛇行説』で説明可能か？

「黒潮分岐流説」もあり、また、「磯焼け説」もあり

宮城県でイセエビ豊漁

宮城県南三陸町では今年、以前はほとんど水揚げがなかった伊勢エビが豊漁だという。

同町での伊勢エビの水揚げは三年ほど前から徐々に増え、特に今年は八月以降、連日まとまって水揚げされて、九月十一日までにおよそ一五六〇キロとなった。これは、昨年一年間の約百七十八キロと比べて、九倍近くにのぼっている。

とにかくすごい変化としか言いようがない。

地元の漁業者もこの状況に驚いているようで、カレイやヒラメなどが獲れなくなってきたので、新たな収入源として期待しているという声もあり、突然の



南三陸ではイセエビ豊漁
・・・南三陸観光ポータルサイトより

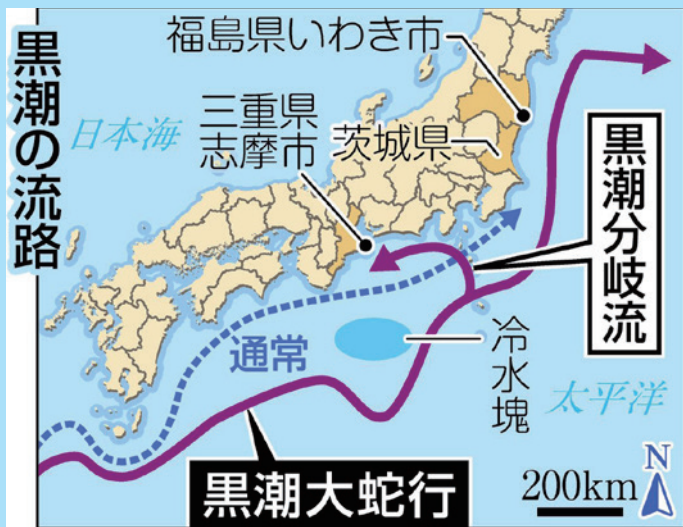
新たな漁業資源の出現に戸惑っているようだ。

イセエビ豊漁の要因分析は途上

イセエビ豊漁の要因について南三陸町の自然環境活用センターは、南三陸の志津川湾では以前から夏場に黒潮にのって小さな伊勢エビが確認されていたが、海水温の上昇で越冬して成長し、漁獲できるようになった可能性があるとの分析しているというのだが、その分析はまだ始まったばかりで、まだ途上であり、本格的な分析はこれからであろう。

伊勢志摩はイセエビ不漁で東北に移動か？

イセエビの本場の伊勢・志摩はどうかと調べたら、



黒潮分岐流が伊勢志摩からイセエビを移動させた・・・
中日新聞2024年1月5日より

ここ数年は不漁だという。かつては水揚げ日本一を誇った志摩市・和具漁港の漁獲量は、二〇一六年には年間四十トンだったが、二〇二二年はわずか七トンまで減少、わずか五年間で六分の一近くまで減少した。原因を探ると温暖化による「磯焼け」だと判明したとのこと。

東北の漁師がイセエビの網を譲って欲しいという笑えない話も出てきている。福島県いわき市でも、以前は獲れなかった伊勢海老が網にかかるようになり、「磐城イセエビ」としてブランド化したという。

この先、イセエビは、房総海老、そして将来は磐城海老、ひよっとしたら三陸海老などと呼ばれる可能性も指摘されている。

原因は黒潮分岐流なのか？「磯焼け説」か？

伊勢志摩のこの漁獲量減少は「黒潮大蛇行」が原因であるとも考えられている。通常は本州に沿うように流れる黒潮だが、二〇一七年八月頃から四国沖で大きく南に蛇行し、紀伊半島から離れてしまった。

これにより、南方で生まれ黒潮に乗って拡散されるといわれるイセエビの稚エビが那智勝浦町周辺に流されてなくなり、資源量減少につながっているとする説も存在する。

また前述のように温暖化による「磯焼け」によるイセエビの移動説もある。さらに、それらの複合説もある。いずれにせよ、決定的な分析はまだのようである。

根室や山形酒田のイカは『黒潮大蛇行説』で説明可能か？

他にも原因がありそうな気がするのだが……



根室近海のイカと潮の流れ・・・FNNプライムオンラインより

根室のスルメイカ豊漁

スルメイカといえば函館をイメージするが、函館では十年ほど前から不漁が続いている。

しかし、そこに突然、根室でスルメイカ豊漁のニュースが発信された。

水揚げ量は、四年ぶりに百トンを超えた。二〇一五年までは比較的漁獲量があったが、それ以降は低迷し、二〇二四年はゼロだったという。

釧路水産試験場の調査研究部の見解では、根室市を含む北海道東部海域では昔からスルメイカは漁獲されているが、現時点では、ここしばらくの不漁の中では比較的いい状況と相変わらずの慎重な見方をしている。

根室にスルメイカが来る理由とは

同じく、釧路水産試験場の調査研究部の見解によれば、太平洋を北上してくる群れは大きく分けると沿岸を通る場合と沖合を通る場合があり、その配分は年によって変わり、沖合を通る群れが、今年はたまたま根室市近辺に来遊し漁獲されているという見立てであるから、現在は好調な水揚げでも、今後も続くかどうかには慎重な見方である。

酒田でスルメイカ豊漁

山形県酒田港の水揚げ量全体の約三割を占めた「スルメイカ」は、二〇二四年、記録的な不漁となった。

しかし、県内の中型イカ釣り船団が今年六月に酒田港に入港した際には、豊漁でほとと一安心したようだ。県漁業協同組合によると、今回の水揚げは約一万五千ケースの百九十九トンに上り、昨年度の船凍イカの総水揚げに迫る量で、出だしとしては好調で、魚体も大きくなってきたので上向きだと思っているが、これから続くか続かないか心配である。まだ喜べる状況ではないと慎重な見方をしている。

酒田港は日本海側にあるが、スルメイカ漁は太平洋側で行われており、豊漁の要因は根室と共通していると思われる。

豊漁・不漁分析は別としても魚の移動は現実！

東北近海だけでなく、日本各地の『サンマ』、イセエビ、イカの豊漁と不漁を取り上げて、その状況と原因についても概観してきた。

原因については「黒潮大蛇行」が関係しているようだが決定的な結論は見いだせなかった。しかし、現に魚は移動している。こうした現実を踏まえて、東北水産業の未来を次号以降で考えていきたい。

秋の岩手に新たな風を求めて― 日本を揺るがす「最後の砦」の事

毎年九月の始めになると必ず思い出す事がある。

宮澤賢治による有名な童話『風の又三郎』なのであるが、特に個人的には一九八九年製作の映画化作品における、長く降り続く豪雨のシーンなどが印象的である。本作は何と戦前・戦後に続く三度目の映画化で、賢治作品の実写化が他にもほとんど見られない事からも如何にそのイメージが多くの人々の心を捉えていたかが窺えるところだ。

物語は東北山間のある村落、その中の小さな学校の新学期が始まった九月一日から十二日までの二週間足らずの間の出来事で、夏が終わり台風の到来など変わりゆく季節の中、古より伝



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入ってもとりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

承される精霊「風の三郎」

を思わせる不思議な転校生と地元の少年らとの交流が地域の自然や文化の濃厚な描写とともに描かれていく

映画は設定に多少の変更が加えられているが、賢治の愛した剣舞のシーンも含め当時の岩手・東北の情景や民俗が美しく投影された貴重な作品と言えるだろう

当作品を想起すると同じくして九月は私を岩手への旅に誘う時節でもある。

先の六月には、仙台に移住して以来実に二十年弱振りの、念願の福島方面ツーリングを行ったのだが、今また北方への憧憬に突き動かされる私の前に、岩手は一見変わらぬ懐かしさの裏で、思いがけぬ鋭利な新機軸を忍ばせ目前に広がるのであった。

※

先の拙稿などにも露わであるが、このところ世界情勢の煽りも食う形で日本という国自体が移民問題、海外勢による国土買収問題などで途方もなくおかしい状況に陥りつつあり、また直近では他ならぬ宮城県の現職知事が巻き起こす諸問題から来月の知事選が全国的に注目を浴びる事態になるなど、自分一人ではどうにもならぬながら、他人事に考える訳にもいかぬという意識で何だか疲れてしまう・…そのような感慨を抱く

者は私だけではあるまい。

かの岩手人・石川啄木は「東京に行きたい。無暗に東京に行きたい。」と書いて

た。今や、東京でなければならぬという理由は少なくなつたとは言いながら、昨今ネット上で盛んに報道される、大規模で白熱したデモ活動などの舞台はやはり東京他巨大都市で、混沌度は増しながら時代の変化を肌で感じる事ができる場所である事は確かだろう。

地方では人口減少による人手不足が深刻で、企業としては安い労働力確保の為に中東やアフリカからの更なる移民受け入れに肯定的―との聞き飽きた文言だが、

そもそも地方の人手不足は東京・極集中の結果であります地方の雇用体制の改革を行い、東京に燦る人々を政策も後押ししつつ地方へ回帰させていく・…という

方向への舵取りが必要なのではないのか―だが実際には首都圏の日本人は既に減少に転じており、一極集中の一番の担い手は、外国人勢なのだという。ちなみに都道府県別の外国人の割合は、東北各県が軒並み全国的にも低い。外国人として

より生活の充実を図れる大都市部へと自ら移動しつつあるであり、つまり東北は外国人勢からも見放されつつある、という事か。

それなのに、私は啄木とは全く逆に、むしろ尚一層「岩手へ行きたい。無暗に岩手へ行きたい」

のだ・…果たして、日本人の未来の解答はいずれの方向にあるだろうか。

そういえば、私が一九九六年の九月に初めて遠野まつりを訪れ、以来一年も欠かさずこの祭礼行事を見る為足を運ぶようになつて今年でちょうど三〇年になる

この間、様々な芸能団体の名と特徴を覚え、十数年も団体の中心となつて活動する男性や、少女から母親になつて子供を連れながら参加を続ける女性の姿を何人とも見てきた。一方で

私の話に感化された仙台の友人たちが遠野まつりを訪れて共に楽しみ、街なかのバーやスナックまでも開拓などしたが、近年はまた私独りに戻り、結局己のみが何も変わる事ができぬままここに降り立ち呆然として

いる事に気づくのである。私の場合、自身の極度に内向的な性格もあり特定の伝統芸能団体と交流したり一員となつて参加したりなどは一切なく、只々彼らの芸能披露を楽しむ観光客に徹してきた。何か人間関係上のトラブルがあつた場合は、東北各県が軒並み全国的にも低い。外国人として

より生活の充実を図れる大都市部へと自ら移動しつつあるであり、つまり東北は外国人勢からも見放されつつある、という事か。

それなのに、私は啄木とは全く逆に、むしろ尚一層「岩手へ行きたい。無暗に岩手へ行きたい」

徹頭徹尾岩手という地に対して傍観者であり続けているとも言えるのである。

近年、私が長年執心してきた「鹿踊り」がTシャツのデザインになったり、遠野市内に民宿や旅館以外の小規模で近代的な宿泊施設や著名な芸術家の手による児童書図書館ができたりと

派手ではないが着実な新しい動きが見られる中で、今夏にもまた、一冊の小さからぬインパクトを持つ関連書が登場した―『シシになる。―遠野異界探訪記』

がそれである。何気に、遠野の鹿踊りが表紙の本で全国区のは初めてなのではないかと思われるのだが今回画期的なのは私のような祭や芸能を観覧する側ではなく、実際に地域と祭に

関わり、鹿踊りを実践する側からの発信であるという事だ。著者の富川岳氏は新潟県長岡市出身の三十八歳東京の大手広告代理店に勤めるも、地域おこし協力隊として遠野を視察し、幾つかの重要な出会いと助言を得て退職、移住に至つたという。当初熱心な遠野好き

でもなく、民俗学の面白さもわからず、戸惑いながらの生活の末、「絶対に踊りたくなかつた」とすら思つていた鹿踊りの面を着け、舞踏に没入していく。

「この土地に本当に受け入れられた、土地と強く接続できた感覚があつた」と語る彼は現在、地域プロデューサーとして著名アー

ティストと鹿踊りのコラボレーション始め、民俗・芸能・食・音楽など遠野の魅力を広く知らしめるべく伝統文化と現代を繋ぐプロジェクトを多彩に展開し県内外の注目を集めるという。

私は様々な点で衝撃を受けていた。自らも心のどこかで憧憬し夢想していたそのもののような事を実現していた若者がいる―しかし

これは想像以上だ。下手に遠野への思い入れや、芸能への憧れなどの先入観がなかったというところも良かったのかも知れないが、ともかくも本書で痛感する事は、物事への中途半端な関わり方で手に入るものは何もない、という事―そして

社会の動きがどうであろうと、人は己の使命を、人生を全うする外ないのだという事であつた。

今後国内随一の衰退を迎えると当然のように言われる東北の中の一区域、その地への大都市部からの移住組である新世代によつて放たれる地域の輝きを、単なる滅びゆく国の、断末魔に過ぎないと見るか？

「そんなの関係ねえ！」表紙の鹿頭が、そう豪快に笑い飛ばすように私には見えてならないのだつた。

しかし、無論社会の動きにも無関係を決め込む岩手ではない。つい先日には全く別の、衝撃的なニュースが飛び込んできた―岩手県大船渡市にて九州・福岡市

の企業が計画していたメガソーラーの建設が、中止に追い込まれた―というのだ

メガソーラーもまた、最近になつて社会問題の筆頭に登つてきたものであり再生可能エネルギー推進の風潮に乗り、企業が大規模な太陽電池を広大な敷地に設置、生産される電気の販売を目論むものであるが、その為に森林伐採などの自然破壊を行い、エコを謳いながら本末転倒であるとの批判の他、事業の大半を中国企業が独占しているなど侮れぬ火種を抱えている。

特に北海道の釧路湿原というラムサール条約登録の保護されるべきはすの貴重な自然環境を、その開発の波が脅かす現状が、目下台風の日となり議論が巻き起こっている状況だ。

そのような中、他ならぬ岩手県にて二つの建設計画が頓挫した―人件費や資材費の高騰を理由としているが、実際には地元住民の根強い署名運動の影響が考えられ、まさに動かぬ山を揺るがした感がある。

しかしこの出来事は一つの大きな既視感をも私にもたらした。岩手県でこのような偉業が成つたのは、決して偶然ではない―そう感じる根拠があるのだ。

『吾が住処ここより外になし 田野畑村元開拓保健婦のあゆみ』という一冊がある―盛岡駅内の書店・さわや書店フェザン店の店頭に「岩手に原発がない理由が

の企業が計画していたメガソーラーの建設が、中止に追い込まれた―というのだ

メガソーラーもまた、最近になつて社会問題の筆頭に登つてきたものであり再生可能エネルギー推進の風潮に乗り、企業が大規模な太陽電池を広大な敷地に設置、生産される電気の販売を目論むものであるが、その為に森林伐採などの自然破壊を行い、エコを謳いながら本末転倒であるとの批判の他、事業の大半を中国企業が独占しているなど侮れぬ火種を抱えている。

特に北海道の釧路湿原というラムサール条約登録の保護されるべきはすの貴重な自然環境を、その開発の波が脅かす現状が、目下台風の日となり議論が巻き起こっている状況だ。

そのような中、他ならぬ岩手県にて二つの建設計画が頓挫した―人件費や資材費の高騰を理由としているが、実際には地元住民の根強い署名運動の影響が考えられ、まさに動かぬ山を揺るがした感がある。

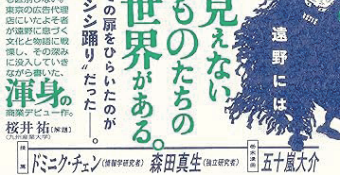
しかしこの出来事は一つの大きな既視感をも私にもたらした。岩手県でこのような偉業が成つたのは、決して偶然ではない―そう感じる根拠があるのだ。

『吾が住処ここより外になし 田野畑村元開拓保健婦のあゆみ』という一冊がある―盛岡駅内の書店・さわや書店フェザン店の店頭に「岩手に原発がない理由が

の企業が計画していたメガソーラーの建設が、中止に追い込まれた―というのだ

メガソーラーもまた、最近になつて社会問題の筆頭に登つてきたものであり再生可能エネルギー推進の風潮に乗り、企業が大規模な太陽電池を広大な敷地に設置、生産される電気の販売を目論むものであるが、その為に森林伐採などの自然破壊を行い、エコを謳いながら本末転倒であるとの批判の他、事業の大半を中国企業が独占しているなど侮れぬ火種を抱えている。

特に北海道の釧路湿原というラムサール条約登録の保護されるべきはすの貴重な自然環境を、その開発の波が脅かす現状が、目下台風の日となり議論が巻き起こっている状況だ。



『シシになる 遠野異界探訪記』亜紀書房 2025 年

に好き勝手にやられてたまるか―という無上の反骨、蝦夷以来の岩手魂たるものが今もこの地に受け継がれている事に間違いはない―そう思えてならないのだ。

地域を歩き回り信頼を得て勝利した、という事では今年の秋田県知事選における鈴木健太氏の功績を看過する事ができない。

対立候補は政党連合を組み業界団体含む権力総出で潰しにかかるが、秋田ニートラル宣言を掲げる無所属の鈴木氏は地道な演説活動とネット活用により若者・子育て層の絶大な支持を得て当選。令和の民主主義の胎動、組織票時代の終焉を予感させる革命との声もあり、まさに秋田・岩手両輪による東北の底力の開花を思わせたのである。

※

東北の消滅危機だの、第一の衰退地域だの「勝手にほざいていろ」と言いたい日本を揺るがす風はまさにここ東北から吹いているのだ―私はその新たな風の又三郎に出会うべく、岩手の旅へと向かうとしよう。

決める、政治家や大企業ら



ししの奉納



クロアゲハ



クサギ

シリーズ 遠野の自然
「遠野の白露」
遠野 1000 景より

最近、『線状降水帯』という異常気象が全国で発生。結果、街中に水があふれ、雷も竜巻も頻発している。何だか東日本大震災で盛んに使われた「想定外」という言葉が流行りそうである。つまり、今度は全国の治



祭りの日



囚われのハクビシン

水対策の「想定外」である。現在の雨水排水システムが想定する『限度』を軽々と超える大雨のために水が町中に溢れ出すという状況が全国あちこちに出現しているのだ。そしてこの異常気象は当分続く可能性が高

い。根本的な対策はすぐには無理のようだ。だから、この国はしばらくは異常気象と雨水反乱になすすべく直面するということになる。安定した自然循環のありがたみはこれから分かるのだ。



祭り人



爪痕



ウドの花とミドリヒョウモンチョウ

シリーズ【東北を再発見する旅】…②②「福島県富岡町への旅」 大震災から4年半後の多くの異様な光景に直面した取材旅行



大量の汚染土袋の山



ここは元駅舎だった？

今からちょうど十年前のその旅は、旅の少し前までは立入禁止であった福島第一原発の放射能汚染エリアである福島県富岡町への取材旅行だった。

その旅はまた、さまざまな衝撃を受けた旅でもあり、いまでもけつして忘れられない旅であった。

それは、東日本大震災発生からすでに四年半経過した時の旅ではあったが、放射能汚染による影響がまだ強烈に残っており、震災後は立入禁止区域だらけだったために震災からの復旧作業はほとんどなされず、街は大震災発生直後の生々しい状況をとどめていた。

＊

目的地に近づくと、最初に目に飛び込んできたのはたくさん的大型ダンパーカーがひっきりなしに行き交っている状況だった。

除染進行中の看板があちこちに立っていたから、除染土の除去作業のために多くのダンパーが近隣からも駆り出されていたのだろう。

そのためか、除染地域に立ち入らないよう呼びかける看板もたくさんあった。津波の影響なのか、途中で真つ二つになった電信柱が片づけられずにそのまま放置されていて、奇妙な違和感を覚えたこともあった。

かつては駅だった場所もあまりにもたくさん草で覆われていたために、かつてはそこが駅だったことをすっかり忘れさせていた。

また、地震と津波で破壊されたままのたくさんの家屋が放置されていたのだが、震災後にあわただしく避難した様子が思い浮かぶような光景だったし、震災直後からしばらく人が立ち入った気配がまったくなく、「ゴーストタウン化」したことを示していた。

津波で流された自動車が横転したまま放置されている景色も異様に見えた。

あるいはまた、野生化した動物の出現に注意するよう呼びかける看板もあった。その看板から想像できたことは、元住民たちに捨てられた動物たちが生きるために野生化してしまったこと、そして野生化した動物たちがいつの間にか人間に危害を加える可能性がある存在と化してしまったことだった。

人が住まなくなった広大なエリアというのは、わずか四年半という短い時間で簡単にそうした人間の居住に危険な地域に変化していくものだということをあらためて思い知らされた。

＊

周辺をあちこち車で探索したら、突如として、タテ

ヨコ二メートル弱の真つ黒な分厚いビニール状の巨大な袋が山のように積まれた異様な光景に出くわした。

それらは放射能汚染土を詰め込んだ大量の袋だった。それにしても、あまりにも圧倒的な量であり、行き交う大型ダンパーの数をみれば、放射能汚染土の詰め込み作業や山積み作業はまだ途上であることを告げていたし、この先、これらの大量の汚染土がどうなるのか想像するだけで身震いがした。

＊

それらの光景は、東日本大震災発生から四年半経過した福島第一原発の放射能汚染エリアが、マスメディアの報道からすっかり消え、国民の関心も薄れ、忘れ去られ、結果的に放置され、このエリアだけが周囲から孤立しながら、一方で除染作業が注目もされずに進んでいるという状況であった。当新聞がこの取材を敢行して、こうした現実を伝えられたのは良かったのだろうか、それとも余計なお世話の非常に複雑な思いを抱えたままの取材旅行だったし、いまでもその思いは続いている。



除染作業中の作業員たち



野生化した動物注意の看板



除染作業中の看板とダンパーカー



真つ二つに折れた電柱



写真でお伝えする
「岩手の秋祭り」

東北の風景

写真撮影 尾崎匠

